

CONTACT Japan

～ SF 大会企画レポート 32号 ～

発行

CONTACT Japan

代表 : 大迫 公成
〒578-0925 東大阪市稲葉 1-5-11-523
事務局 : CONTACT Japan 事務局
〒477-0034 東海市養父町諸之木 26-3
エスポア横須賀 802 竹林方

日本 SF 大会 G-con で FCS 企画を開催

日本 SF 大会では久々に、G-CON で FCS 企画を行ないました。今回は、CONTACT Japan 1 や i-CON の企画と同様の、

- ・異星人側は、異星人と自分たちの住む惑星や恒星系の設定を行う。
- ・地球人側は、宇宙船を設計し異星人の住む恒星系を訪れる。
- ・地球人の代表と異星人が異星人側の星系でコンタクトする。

という形式です。

この形式は、ファースト・コンタクトをできる限り真面目にシミュレートしようという面からすると必ずしも最適とは言えないものの、もっともシンプルで SF 大会のような短時間の企画や CONTACT のすべての要素を体験するには適した方法です。

地球人側

歴史的な経緯により、未知の存在と遭遇した場合は最初にコミュニケーションを成立させたチームが所属する組織が交渉を完全に独占することが認められている社会だった。そのため、知的生命からのものと思われる信号を受信した地球では多くの集団（国家、企業、宗教団体、金持ち）が、発信源である恒星系に向

けて、危険度度外視・片道のコンタクトチームを送ると言う状況になった。

地球人側チームが代表する国家では、1.5世代型と呼ぶ宇宙船に、小学校低学年程度の子供5名と30代の大人2名を乗せ出発した。50数年の航行の末に、100光年離れた恒星系に先着させることに成功した。

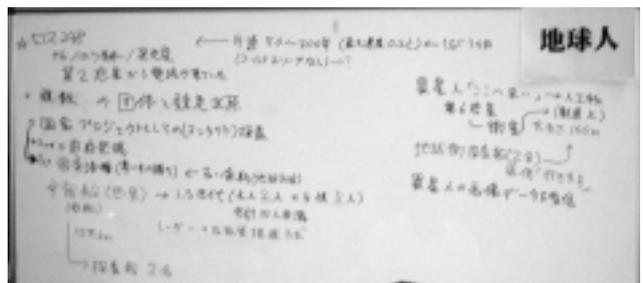
コンタクトが成功すれば、国家は彼ら7名を国家英雄と称え、彼らの子孫や兄弟たちを優遇したに違いない。

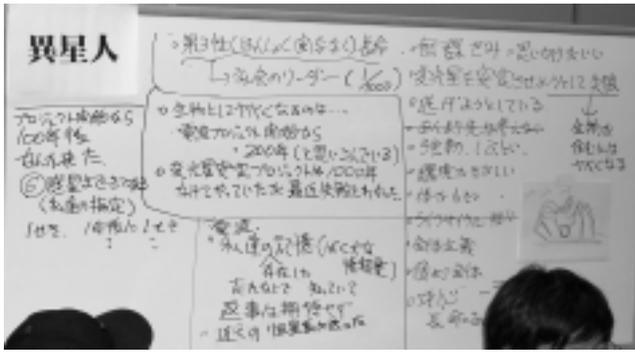
異星人側

異星人の住む惑星の主星は変光星であった。そのため、彼らは強靱でしぶとい生物に進化した。また、若干無謀ともいえるほどの、思い切りの良さという性質を持った。彼らの寿命は地球年にして50年ほどである。しかし、1000体に1体程度の割合で、生殖能力がなにかわりに寿命が200年ほどになる個体が生まれる。この長寿命個体が社会のリーダーとなってきた。

さて、彼らの主星が変光星であることは、長年彼らを悩ませていた。技術文明を手にした彼らは、恒星の状況を改善しようとしたが、逆に失敗してしまった。そして（彼らの観測によれば）約200以内に恒星系は居住不能になってしまう結果となった。まだ恒星間航行能力を持たなかった彼らは、自分たちの持つすべての情報を周囲の恒星系に向けて送り出すことで、自らの存在した歴史を、宇宙のどこかに残そうとしていた。

なお、彼らの通称は「ペンタ」と命名された。





交渉

異星人側にとっては、すべての情報はすでに送ってある。当然ながら、地球人は近いうちに恒星系が居住不能になると知って、わざわざ訊ねてきたと考えている。しかし地球人は、情報を詳しく解析するよりも先に到着することを優先してやってきたため「まずは、交渉権を得てから」と考えている。

そのため、恒星間航行能力をもった地球人に自分たちの種族の存続を期待する異星人と、細かい状況は知らないままに異星人との交渉権獲得により将来的に利益を得ようと画策する地球人の交渉は最初からかみ合わないものとなった。

結果

言葉はそれなりに通じる、お互いに交渉の意志もっている、相手を攻撃したり騙したりするつもりもない。という好条件ながら、意思の疎通をはかるのはやはり難しかったようである。

またゲストには野尻抱介さん、林譲治さんにそれぞれのチームで参加していただきました。

地球人側参加者感想

ネット巡回中「ファーストコンタクト」の件を知り、岐阜での大会で行われるということで早速参加させていただきました。異星人とのコンタクトの方法はいったいどんなものになるのか？以前のレポートなどを読み早速大会へ。

「地球人側で参加」とだけ決めていたのでいったいどんなことが出来るのか、またどんな「異星人」と出会えるのかときどきしながら、「地球側の体制」、「宇宙船の決定」などを順に決めていく中、他の参加者に賛同したり異を唱える中でだんだんと形作られ自分たちの現実とリンクするような設定が出来上がっていく様は大変楽しかったです。

他国との競合状況にある国際社会で、「なにはともあれ一番乗り」を目指した結果、見事に異星人と遭遇、しかし、その星系は太陽の寿命により移住の必要

に迫られていたというくだりはこちらの目論見とはいささか外れたものでしたが、当初の目的は達せたのではないかと思います。

今回のシミュレーションの中で感じたのは1つのコミュニティのなかでも意見の相違で発展もすれば停滞もするということや、他の価値観を尊重しなければよい交歓は保てないということを実感しました。

今回は短い時間の中でしたが、本来の企画のように長い時間での参加も楽しそうなので機会がありましたらぜひ参加したい思います。主催者の皆様、参加者の方々、ゲストの先生の方々、ありがとうございました。

(中野まことさん)

異星人側参加者感想

「我泣き濡れて蟹とたわむる ~ペンタ辞世の句」

二人の地球人は慎重に着陸用宇宙艇を、小さな宇宙ステーションから張り出したプラットフォームによせた。

ステーションの壁面が二人を招くように大きく開く。恐る恐る入っていくと、内部はさほど広くない格納庫のような部屋で、五角形の天井全体がモニターにでもなっているかのように明るく光っていた。そして三体の異星人がその部屋の中央にいた。三体はどれも似たような宇宙服を着込んでおり、全高1mのずんぐりとした5本足の蟹のような姿だった。

地球人たちは急ごしらえの翻訳機を恐る恐る試してみた。

「...はじめましてこんにちは」

『どうもどうも！いやあ、よくきた。まあどうぞ』

地球人は翻訳機が調子よく吐き出した言葉にギョツとした。

向って左側の異星人が軽快な足取りで数歩前に出てきた脇で、残りの二体がぎこちなく体をゆすっているところを見ると、彼らの間でもこの左の個体の挨拶はいささか唐突なものだったようだ。

「あ...えー、私たちはあなた方と平和的に交渉をしたいと思います」

地球人は気を取り直して本来の重要な要件を切り出すことにした。

「私たちはあなた方の知識と交換に提供できる知識もっています」

『情報を提供。はい』

異星人のほうも挨拶はそこそこにして本腰をいれて話をする気になったようだ。全員が少し落ち着き、今度は中央の個体が話し始めた。

「ただしそれには条件が一つあります。知識の交換は私たちのみで行い、消して後続の船の者達とは行わないで欲しいのです」

『あなた達と後の船、別の集団/群れに所属しているのですね？ 違いは何ですか？』

「後の船もあなた方との知識の交換を目的としています。しかし我々は先に着いたのですし…」

『あなた達と後の船、競合しているのですか？』

「いや、競合というか競争？うーん、なんていえないのかなぁ」

いささか信頼性に乏しい翻訳機はこのあたりで負荷に耐えかねて壊れ始めた。それまでそれなりにまっとうに落ち着いた会話調で出力されていた異星人の声が、だんだん怪しい調子の単語の羅列に変わってきたのだ。ただそれはもしかすると故障ではなく、なんだか妙に些細なことにこだわっている地球人に対して異星人たちがじれてきて、翻訳機が訳し安いように丁寧に話す手間をすっ飛ばし始めたからだったのかもしれない。

『あなた達、私達の通信、聞いて、来た。私達の事情、わかる？』

「はい。わかります。あ、でもここにつく直前によくなんとか少しづつわかってきたというだけで、全部はまだとても…」

そう。とにかくこの異星人たちが地球に向かって発信したメッセージの情報量は膨大で、とてもすべてが解析できるような代物ではなかったのだ。

そしてなんとなく"私達の事情"なるものに嫌な予感を覚えた地球人たちに、異星人はとんでもないことを告げた。

『私達 太陽 ボン！ 助けて！ 情報！ プリーズ！！』

「はい～????」

「た、太陽、ボンって…後何年？」

『あなた達 ここまで 来た 3倍』

地球人達は外で今も輝いているであろうこの星系の主星を思い浮かべた。彼らが50年間ずっと目指して飛んできた変光星。それが150年後には爆発するとは…。中央の異星人は気のせいがいささか悲壮感を漂わせて語り始めた。

『私達 太陽 少し 嫌。私達 太陽 直す しかし…失

敗。 太陽 ボン！ 逃げる できない 私達 滅びる。私達の記録 伝える/遺す 私達 居た 証し 伝わる 私達 うれしい』

そこでそれまでとうとうと語っていた異星人がずいとい歩近づいたので、呆然と話を聞いていた地球人達は思わず身を引いた。

『しかし あなた達 私達の通信 聞いて 来た！ 私達 助ける 来た！！』

「い、いや、その…(そんなつもりは)」

『助ける 情報 プリーズ！ 恒星間宇宙船 製法 情報 くれる OK？』

ここで地球人達はなんとか自分達の本来の使命を思い出し我に返った。

「いいだろう。船の情報ぐらい渡す(なァに、重要なところは伏せておくことだってできるわけだし問題ないだろう)。ただし情報交換は我々のみとだ。後続の船の奴らとはダメだ」

『あなた達 後の船 情報 質 同じ？ あなた達 悪い 後の船 良い？』

いささか懐疑的な態度になった異星人達に向って、地球人は胸を張って言い切った。

「そりゃ俺達のがいいとも！なんてったって俺達の船のが早くここに着いたんだぞ！！」

『おおーっ』

地球人のはったり勝ちだった。

かくして異星人との交渉権と国家の威信を賭けた争いに勝利した地球の某国代表と、星系が滅びる瀬戸際で失うものは何もないと開き直っている異星人との間の交渉が始まった。もしかするとX年後、某国あてのクール宅急便で冷凍蟹数十億杯が地球にやってくるかもしれないが、それはまた別の話である。

(山本香月さん)



アメリカ「CONTACT 2004」参加報告

その2:「プログラム内容報告 - 1」

CONTACT Japan 代表 大迫公成

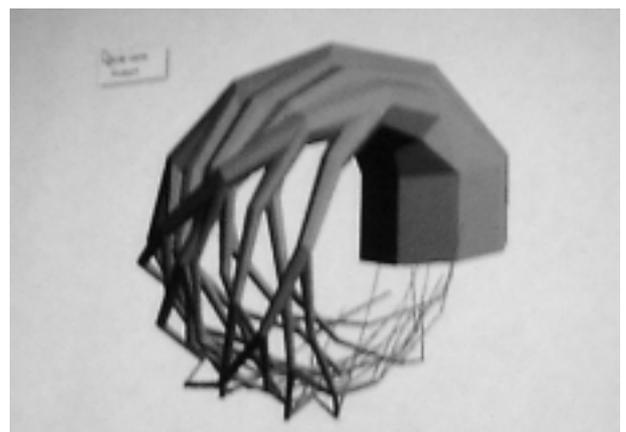
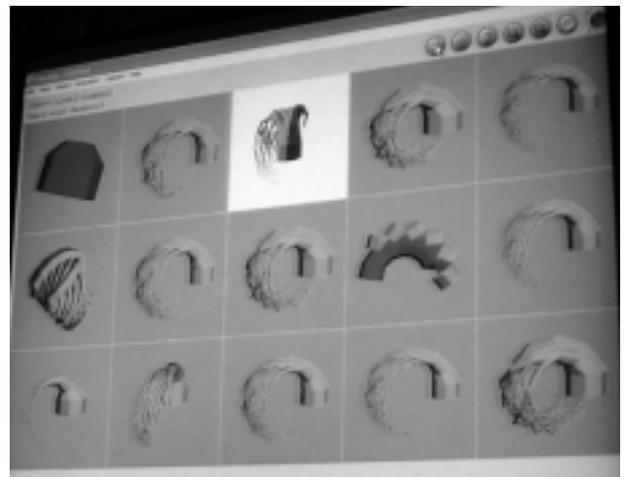
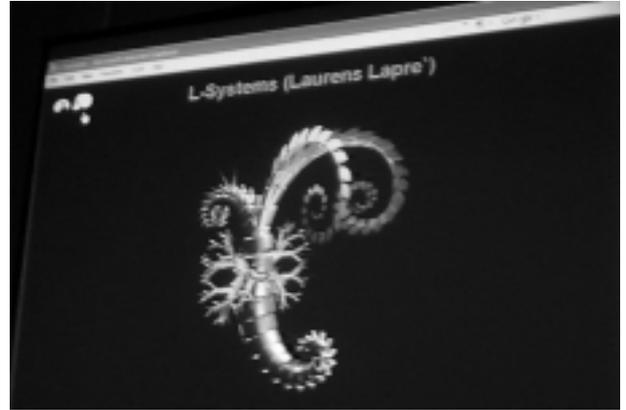
まず初日のプログラムから順次内容を紹介します。

「月と火星：ヒューマニティの次のステップ」
マイケル・シムズ
(NASA Ames 研究所火星探査センターの科学者)

最新の火星立体画像をいろいろと見せてくれた。これはアナグリフ(anaglyph)という立体視で左に赤、右に青のフィルムが入っためがねが配られそれで画像を見る。ご存知の方も多いと思う。もちろんNASAやJPLのウェブサイトでも見られるのだが、やはり最新映像を大スクリーンで見るとシムズさんの解説もかなりの迫力である。アナグリフにはまりそうだ。

「火星と時間感覚」
オリバー・モートン
(サイエンスライター。火星に関する著作多数)
火星に人類が降り立ったときその地理学的な特長からどのような感覚を得るだろうかという話から始まった。例えばグランドキャニオンの崖にたつときの素晴らしい眺望は、はたしてマリネス渓谷を眼前にしたときの気持ちと比較できるのか。火星の景色はどのように人の目に映るのか。ひとの人間性は月世界の次に火星の開発に向うとしたらどういう具合に対応していくのだろうか。地質学的な年齢からも火星に生命があったとしたらその化石を発見するだろう。そこから火星で流れた時間感覚を読み取り、火星の古代の姿を考えてみる。時間に拘束された感覚がそこにある。もちろん火星に住むようになっても主な流れは人類の歴史そのものであることに違いはない。

「斬新なデザインツール」
キース・ドイル
(アーティスト・コンピュータープログラマー)
プレゼンテーションされたアプリケーションはなかなか面白かった。「Mutation Software」というよくある生物の進化プログラムだが、このプログラムは実によく作られたアプリケーションで、まず画面に基本的な構造の生命体を作り、いろいろな要素を3D画面で入力してやるとひとりでの進化というか変異が進んでいく。このパラメーターの入力が楽しい。もちろん前の



段階に戻すこともできるので比較研究も可能だ。このソフトがあればFCSの際にはイメージを具体化するという大きな効果があるだろうし、アーティスト探しに苦労することもないかも。もちろんフラクタルのプログラムも組み込まれていた。会場の反応も大きかった。画像をみていただきたい。



「ジオフュージョンの火星」

チャック・スタイン

(ソフトウェア視覚化技術のジオフュージョン社の共同創設者)

GeoFusionという視覚アプリケーションの会社を作っていて、今回はやはり火星の地形を動画で堪能させてあげようというプレゼンテーションであった。月面や火星の今後の探査、特に有人探査には役立ちそうだ。

「火星の人類：ひとつのゴール、多くの方法」

リック・スターンバック

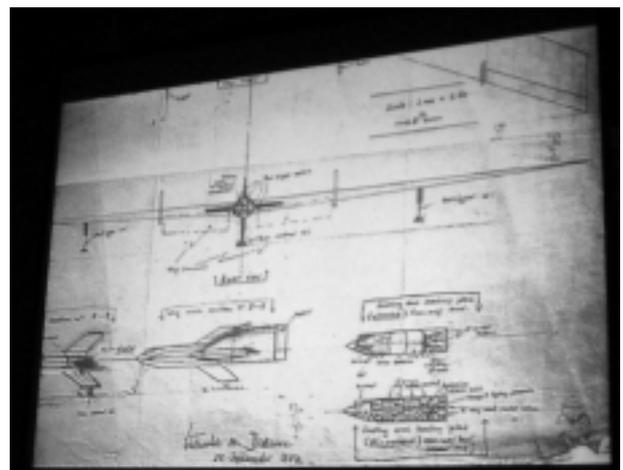
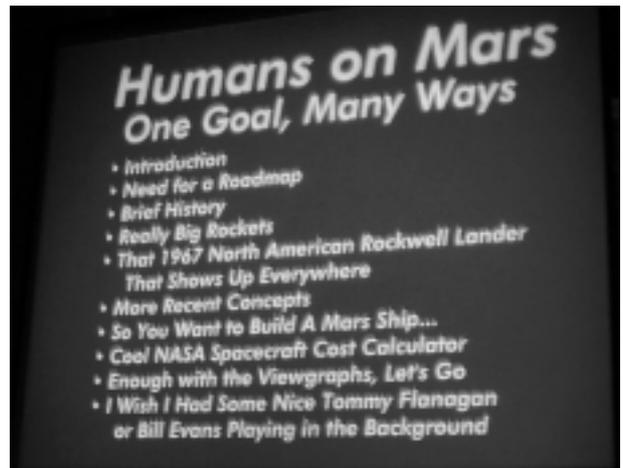
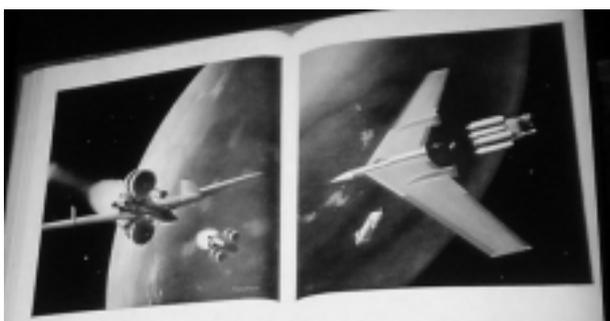
(技術者・科学者・アーティスト。スタートレックシリーズのメインアーティストとしても有名。)

Space Model Systems社を設立

<http://www.spacemodelsystems.com>)

彼のプレゼンテーションも設立したコンピュータグラフィックスの会社の作品を使いユーモアのあるものだった。月面で撮影されたスニーカーの写真など貴重なものである。もちろんジョークなのだけど。

続く



CONTACT Japan No.7



CONTACT Japan 6 開催のお知らせ

2003年11月12日(金) : プレ企画

11月13日(土) ~ 14日(日) : 本企画

みなさん、いよいよContact JAPAN 6 の開催が迫ってきました。お申し込みはお済みでしょうか? いつもの事ながらスタッフは準備に大わらわ。直前になってバタバタするのは、子供の頃の夏休みの宿題と一緒にですね。スタッフを助ける、またお尻を叩くという意味でも、早めの申し込みをお願いします。詳細は同封の案内書をご覧ください。

お知らせ

まだまだ残暑が厳しい日が続きます。こんな豪雨と猛暑が毎年来たら、日本の生物に新たな進化が生じないかな... など、うだる頭で妄想してしまいます。

さて、前号から掲載しています、大迫代表によるアメリカのCONTACTに参加レポートは今号では収まらず、さらに次号へと続きます。

また、現在スタッフはCJ6に向けて、夏バテにめげず鋭意活動中です。案内書を同封しています。是非ご参加下さい。

いつもながら、皆様からのご意見ご要望もお待ちしております。こちらもよろしくお祈りします。

お問い合わせ

〒

〒 477-0034 東海市養父町諸の木 26-3
エスポア横須賀 802 竹林方
CONTACT Japan 事務局

TEL

ID

contactj@tty.gr.jp

E-mail

majordomo@ml.asahi-net.or.jp

subscribe contact-j@ml.asahi-net.or.jp

unsubscribe contact-j@ml.asahi-net.or.jp

E-mail

contact-j@ml.asahi-net.or.jp